
The world revolves around × × × .

薬剤師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The world revolves around xxx .

【Nコード】

N6803J

【作者名】

薬剤師

【あらすじ】

もと『えぶりでい日本!』です。
書いているうちに他の国についても書きたくなってしまったので、かなり大幅にいろいろ変えます。それでもやはり、日本の出番が多そうですが。

閲覧の際には、画面から離れて下さい。なおヘタリアにアレルギーがある方には、閲覧をお勧めすることはできません。《国は全部実名で出てきますが、実際の国、ご本家様とはなんの関係もありませ

ん。
あらかじめに承下さい
《

世界は運動を中心に回ります 1 / 3 (前書き)

時代：現代

場所：日本

登場人物：日本 中国

世界は運動を中心に回ります 1 / 3

世界は運動を中心に回ります

ここは日本の家。

そして今、季節は身も凍るような冬。

「寒い、ですね」

日本はコタツに入り寒がっていた。羽織ったどてらが、彼を幼く見せている。

「ふう……何か暖まる飲み物でも！？」

台所に行こうと立ち上がった日本は“も”に濁点を付けるという偉業を成し遂げた。彼は床に置いてあった段ボールに、足の小指をぶつけたために“も”という奇声に近い言葉を発したのだろう。しばらくの間は足を両手で持ち、うずくまっていたが、やがてゆっくりと態勢を起こした。

「ア、アメリカさんからの郵便物…すっかり忘れていました」

日本は恨みがましい目で見つめながら、段ボールを開ける。段ボールに非はないが、他に恨む対象がなかった。

開けた段ボールの中には、手紙とDVDが入っていた。日本は早速手紙を読む。

《やあ日本！ 元気にしてるかい？ 僕はもちろん元気さ！！ こないだなんか元気過ぎて、電車を持ち上げちゃったよ！》

下手くそな日本語でそう書いてあった。だが一生懸命さが伝わってくる、元気な字だった。

「電車をつて……あなたはスーパーマンですか」

日本は汗マークを額に出しながらも、読み続ける。

《あ、そうそう。今回は君にプレゼントがあるんだ。一緒に入ってるDVDは、今こっちで流行ってるエクササイズなんだよ！ 君、流行りもの好きだろう？》

「エクササイズ——」

《それにほら、君は弱々しいから、これで鍛えて強くなるといいよ！》

「——失礼な」

日本は弱々しいと言われ（書かれ）むっと眉を少し寄せた。彼には日本男児としての誇りがあるのだ。

《あと、これは女性のダイエットにも人気があるんだ！ もっと欲しくなったら、いくらでも言ってほしいでゲイツ》

「彼は商売してるんでしょうか」

なんだか話しに一貫性がないアメリカからの手紙に、日本は苦笑

した。そして読み終えた手紙を、律義にも引き出しの中に入れる。

「せっかくの頂き物ですし、試しにやってみましょうか」

日本はそうつぶやいてDVDを開く。言葉はさっぱりしているが、内心は人気があるというエクササイズをやりたくてしかたがなかった。《君、流行りもの好きだろう?》というアメリカの言葉はなかなか射っていたのだ。

しかし、日本は衝撃の事実を知ることとなる。

「英語は読めません…」

当たり前だが英語表記だった。まだ日本で知名度が低い商品なので、和訳されていなかったのだ。

「ですが、言葉の壁など越えてみせます!」

びつ、ういゝゝ、がちや。

日本は力強くDVDをセットした。テレビ画面に、パツと人が映る。その人は年齢不詳のマッチョな黒人だった。

「ムキムキですね。この方と比較されたら、弱々しいと言われてもしかたないかもしれません」

日本はため息をつく。

すると、画面のムキムキ野郎が素晴らしい発音で何か言い始めた。この時から、日本とムキムキのバトルが始まる。

「な、何を言っているのかさっぱり……」

日本はテレビの前で呆然とする。しかしそうこうしているうちに、ムキムキ野郎は動き出した。

「まあ、エクササイズですし、あの人の態勢を真似るのは言葉がわからなくてもできます」

日本はムキムキ野郎を真似て、がに股になったり、腕をくるくる回したりしてみた。

「暑い……」

運動しているうちに日本は暑くなったらしく、ぼいっと着ていたどてらを脱ぎ捨てる。だが日本はその後野球拳の如く服を脱ぎ捨て、最終的にシャツとパンツという日曜のオッサンのような格好になった。

「はあ……」

皆様お忘れになったかもしれないが、冒頭で説明した通り今は身も凍るような冬である。にもかかわらず、日本は薄着で汗をかいて息切れしていた。

「ふー…これはなかなか、腹筋にき、ます、ね！」

そして爽やかに腹筋を鍛えていた。

「わん、とー、すりー、ほおー、五、六……九、てん！」

さらに、変な英語を話すようになっていた。流行りものに目がなく影響を受けやすいのは、日本の長所でもあり短所でもある。

いつの間にか、ムキムキ野郎は腰に巻いていたゴムのような物を手に持っていた。日本は急いで段ボールからゴムを引っ張り出す。

「はあ、ふう——道具を使うというのは面白いですね。わくわくします」

日本は息切れしながらも、楽しそうに笑った。無邪気な子供っぽい笑顔だ。

日本はムキムキ野郎と同じようにゴムを両足に引っかけて、その先端を両手で持った。

「……………」

かなりゴムがたるむ。

アメリカ人用なので、日本にはゴムが長すぎた。

——こんなにも身長差が…！

このわけのわからぬ悔しさにより、自然とゴムを握る手に力が入る。それは自尊心のせいだったかもしれないし、嫉妬、羨望からきたものだったかもしれない。とにかく日本の中で、なにかに火がついたのは確かだった。

「負けませんよ……絶対負けませんよ！ あなたが何歳かは存じませんが、私のほうが年上なのです。老いぼれと思い甘く見ないで下

さい！」

ぐるんぐると手首にゴムを巻き、ゴムを短くする。そのまま日本はエクササイズを始めた。

~~~~~  
~~~~~

「ぶっ、び、びいくとりーい」

日本はエクササイズをやり終えた。

万歳するように両手を上げ、「ビクトリー」と叫ぶ。実際には何か違う言葉を叫んでいたが、少なくとも本人はそう言ったつもりだった。

「ふ、ふふふ…私だってまだ若い人には負けませんよ……でもさすがに少し、疲れましたね……」

日本はごろんと床に寝転がり、やりきったように力なく笑った。そして、そのまま寝息をたてて眠ってしまった。

さて、皆さん覚えているだろうか。今季節は身も凍るような冬である。しかしそんな冬にあるまじき姿で日本は眠っていた。寒い部屋の中、汗で濡れた服を着て——しかも着ているのはシャツとパンツだけ。

「ハクシュンツ」

風邪を引くに決まっていた。日本は寒さ（とくしゃみ）で目が覚める。外はもう日が落ちて、部屋の中もすっかり暗くなっていた。

「う……さ、寒いです…」

暗くてなにも見えないので、とりあえず電気をつけようと日本は立ち上がる。立ち上がる、はずだった。

「……痛ッ！」

だが結果的に立ち上がれなかった。中腰の態勢からバランスを崩し、ボタンと倒れる。急激な運動を無理矢理したため、全身筋肉痛になっていたのだ。

「このままじゃ風邪ひいて、ハクシュツ……でも体が動きません、ハクシュンツ」

言葉とは違い、すでに日本は風邪をひいていた。^{たが}

「ハクシュンツ、くあ、ゴホッゴホゴホッ」

しかもこじらせていた。

「ゴホッ——こんな風邪は恐慌以来でしょうか……いや、バブル崩壊の時も大変だッへ、ヘクシュ！」

日本は咳込みながらも、ぼーとする頭で考える。これからどうするか、何ができるかを考える。だが結局考えつかなかった。

——やはり老体に鞭打った運動はいけませんね

そんな情けない考えを結論とした時、ふいに日本の意識が飛んだ。

『中国さん、海はどこまで続いているのですか？』

『海あるか？　んなこと知らねえーある。我じゃなく海に聞くよるし』

『……………』

『この都はとても美しいですね。囲碁盤みたいですよ』

『ふふん——もっと褒めてもいいあるよ？　今ならパクっても怒らないある』

『そうですか？　それではお言葉に甘えて、新しい我が都も——』

『あ、お前その都、我のをパクったあるね？　ちゃんとデザイン料払えある』

『え……』

『日本！ 大朗報ある！ 我を見るあるよ！』

『なんですか。こんな朝から』

『日本！ 日本、早く来るよろし！』

『わかりましたから、静かにして下さい』

『日本っ！！』

「に・ほ・んーっ！」

「うわぁ！？？」

日本は飛び起きる。が、筋肉が痛み即座に倒れる。

「なんでそんな格好で寝てるあるか？ 韓国が来たら危ないあるよ」
「中国さん！？」

いつの間にか中国が来ていた。このままでは動けない日本は、仕方なくこうなった経緯を話す。だが恥じらいからか、中国からはずつと目を逸らしていた。

「日本はじじいのくせに見えっ張りあるなあ……あ、じじいだから頑固あるか」

一連の話を聞いた中国は、納得したように手をつった。日本はそれに対抗しようとするが、咳とくしゃみでイマイチ迫力に欠ける。さらにいえば聞き取りにくい。

「ヘクシュ——そんな何度もじじいと言わないで下さい。それに、ゴホッ……あなたのほうが年上でしょう。四千年の歴史はどう、ゴホッゴホッ……した、んですか？」

「そんな歴史、家に忘れたある。あと我の心は永久に少年あるよ」

日本の必死の年齢反撃は、中国に軽く流された。

「しかたないあるなあ……よし！ 我がお前の看病してやるある」
「え——あ、ありがとうございます」

予想外の中国の反応に、日本は驚く。

「お代は高くつくあるよ」

中国はニッと笑ってウインクした。

~~~~~  
~~~~~

「ほら日本、芋粥ある。我のは特別美味いあるから、心して食うあるよ」

「ありがとうございます」

日本はかるうじて動かせるようになった手で、れんげを持ち、粥を掬う。だが口に運ぶ途中でれんげごと床に落としてしまった。

「はあ……我が食べさせてやるある」

「すみません」

「日本の介護は大変ある」

「介護って……」

日本は中国に粥を食べさせてもらう。恥ずかしいが、嬉しかった。

——たまにはこんな日があってもいいですね

日本は全身筋肉痛のなか、ふふつと優しく微笑んだ。

世界は運動を中心に回ります 後日談

筋肉痛とか筋肉痛とかがもろもろ治ったある日の朝、日本はピツとテレビの電源を入れた。その日のニュースでは“中国の二セ〇〇”とかいう特集を放送していた。

「あの人も飽きませんね」

日本はクスツと笑う。そして二セ特集を楽しそうに見はじめた。

『我々取材班は、中国商品を売っているサイトからビリー〇ブート〇ヤンプを購入しました』

「これは私が先日やっていた…」

日本はやり終えた時の素晴らしい達成感と、筋肉痛の絶望感を同時に思い出す。もう日本があれをやることはないだろう。

『しかしこのケース、見た目はそっくりですが中には違うDVDが入っていました』

『まあ…』

「中国さんつたら。そんなのどこで知ったん……!!」

日本は言いかけて気がついた。そういえば中国にはあのエクササイズの大まかな説明をしたのだ。嫌な予感がした日本は、すぐさまエクササイズのDVDをしまった場所を見る。だがそこにDVDはなかった。そこにあったのは、エクササイズ用のゴムだけ。

「ま、まさか……」

『私が「ゴムはないのですか？」と尋ねると、その中国サイトの関係者は「ゴム？　なんだそれは？　あつたら売れるのか？」と逆に聞いてきました』

「ああー！　やっぱり！」

中国は日本から勝手にDVDを持ち去ったのだ。『お代は高くつくあるよ』という言葉は本当だった。

「もう、知りません……」

日本の気苦労は今日も絶えない。

その後、

『○リーズブルー○キャンプの起源は俺なんだぜ！』
と韓国が主張してきたのは、言うまでもない。

世界は運動を中心に回ります 後日談（後書き）

閲覧ありがとうございます。楽しんでいただけたでしょうか。良くも悪くも感想・ご指摘受け付け中です。

さて、日本がやっていたビリ〇ズ〇ートキャ〇プについてですが、このニュースは実際にやっていたんです。さすが王さん。

世界は花見を中心に回るんだぞ 1 / 4 (前書き)

時代：1900年代

場所：日本

登場人物：日本、アメリカ

世界は花見を中心に回るんだぞ 1 / 4

世界は花見を中心に回るんだぞ

「目は痒くてしょぼしょぼしますし、鼻水がずっと出っぱなしなんです。風邪でしょうか？」

うららかな春、暖かく吹く南風。そんな日に日本は、止まらない鼻水と目の痒みを医者に相談していた。医者はこの辺りに一人しかいないので、病院は異様に混んでいた。

「これは——枯草熱ですね」

医者はそう言った。枯草熱とは、花粉症の古語だ。

花粉症とは花粉によって起こるアレルギーである。春には杉、秋にはブタクサ・ヨモギなどの花粉が原因となり、くしゃみ・鼻水や目の充血・かゆみなどの症状が起こる。だがこの頃にはまだ知名度は低く、詳しい原因もわからず、花粉症という名前もついていなかった。

「え？ すみません、今なんと？」

「枯草熱ですね」

「こ、こそねっ？」

「こ・そ・う・ね・っ、です。ある種の植物の花粉によって起こる反応です。40年前イギリスで、『枯草熱あるいは枯草喘息の病因の実験的研究』という本が出されたんですよ。あなたの症状はその本にあったものとよく似ています。まあ、まだ原因はよく分から

ないんですけどね」

日本は理解できないのか、しばらくフリーズする。そして医者は何もすることがないので、とりあえずそれを見守ってみる。すると日本は突然恐ろしそうに尋ねた。

「あ、あの、それは不治の病ということでしょうか？」

「ふふ、大丈夫です。そんなことはありませんよ」

医者は日本にもよく分かるように、ゆっくり続ける。

「症状は辛いかもしれませんが、言ってみれば季節の病なので、次の季節がくればそれも治まるらしいです」

抑揚ない声でそう言った。

「そういうことです、あまり気にせずにご過して下さい」

「はあ……」

日本はとりあえず返事をした。不治の病でないと聞いて、心底ホッとしていた。

「お大事にー」

診察が終わり日本が病院から出る際、先程の医者が日本にその声を掛けた。

「あ、はい。ありがとうございました」

対して日本はぺこりと頭を下げ、ゆっくりと病院を後にした。

うつらかな春。緩やかに吹く風。だが帰る途中の日本には、そんな景色が少し違って見えた。

「花粉……ですか」

花粉の存在を意識するようになっていたのだ。

「でも花粉が飛ぶのだって、次の花を咲かせるためです。美しい花のため——」

そこまで話し、言葉が止まった。日本は杉の花を美しいと思ったことはない。ちなみにブタクサを美しいと思ったこともない。

「——ま、まあ、木々の成長には必要不可欠なことです。たとえばそれが私を酷く……とても酷く苦しめたとしても」

日本は伏せがちの目で空を見る。その目は赤く腫れていて、うっすら涙が出ていた。

「ガーゼを買って、早く家に帰りましょう」

世界は花見を中心に回るんだぞ 1 / 4 (後書き)

枯草熱について

↓作中で紹介した通りです。もし違っていたら、私の力不足です。

ガーゼを買って…

↓この頃は今みたいなマスクはなく、あったのは革製の高級なものだけだったみたいです。なのでそれが買えない人々は、自分でガーゼを重ねてマスクのようなものをつくったんだとか。

世界は花見を中心に回るんだぞ 2 / 4

家に帰ってきた日本は、玄関の前で立ち止まった。ふと、医者に言われたことを思い出したのだ。

「そつえば家に入る前に花粉を落とすんです」

と、いうことで体中を一度掃う。見えない物を掃うというのはいささか難しかった。掃っている感じがしないのだ。

「私は植物と相性が悪いのでしょうか——枯草熱とは不思議です」

首を傾げながら日本は家に入る。

しかしまだ見えない敵（花粉）が付いている気がしたので、風呂にも入る事にした。

湯が浴槽に溜まる音が、家の中に響く。少しすると、浴槽は湯でいっぱいになった。日本はそれを確認し、風呂に入る。

「やはりお風呂はいい——」

ドン、ドン。

日本の言葉を遮るように、玄関扉が叩かれた。

「こんなタイミングで来るなんて、どなたでしょうか」

ドン、ドン。ドン、ドンドンドンドン。

連続して叩かれる扉。

「しょうがないですね。今日はお引きとり——」

突然、勢いよく玄関扉が壊れる音がした。続いて大きな足音が聞こえる。さらに恐ろしい事に、その足音はだんだん近付いてくる。

「あ、あの不法侵入ですよ!?　すぐにお帰り下さい!」

謎の人物は風呂場の前まで来て、扉をいつきに開けた。日本は慌てて風呂に深く浸かる。

「きゃ、う、うわああああ!　ちょ、いきなり開けない……って」

扉を開けて、そこに仁王立ちしていたのは

「やあ日本!」

「アメリカさん……」

元気なAKY（あえて空気読まない）、アメリカだった。アメリカはなおも元気に喋り続ける。

「今日は君を花見に誘いに来たんだぞ!」

「あー、もうあなたって人は……」

日本は呆れて深いため息をつく。するとアメリカは、何故か早足に風呂場に入ってきた。そして日本の両肩をガシツと掴む。

「だから風呂なんか出て早く行こう!」

アメリカは日本を掴んだまま、持ち前の馬鹿力で持ち上げようとする。

「ひつ——い、嫌です！ 自分で出ます！ やめて下さいやめて下さいお願いしますやめて下さい！」

珍しくも、日本は明確に意思を表していた。

「しょうがないなあ……じゃあここで待っててあげるから、早く出るんだぞ」

アメリカは日本の両肩を掴んでいる手を離す。そして腕を組み、風呂場の壁にもたれ掛かった。

「一旦出て行って下さい！」

~~~~~  
~~~~~

「さあ、日本行こう！」

「少し落ち着いて下さいよ。桜だってすぐには散りませんから」

風呂上がりの日本を、アメリカはぐいぐい引つ張る。しかし日本はなかなか外に出ようとしない。

「ヘクシュッ」

「ん？ 日本、風邪かい？」

アメリカは心配そうに日本を見た。日本は入浴して少し目の腫れ

がひいていたが、それも今はまた復活している。

「いえ、枯草熱です。ああ、あとアメリカさん、洋服を掃いましたか？ あなたの近くに居ると、なんだか悪化するような気がするのですが」

日本は服の裾で目をこする。こするとさらに痒くなることは知っているが、人としてこすらずにはいられない。

「花粉？」

アメリカは自分の服を見る。次に目をこすっている日本を見る。そして、気付いた。

—— あ、日本は H a y f e v e r なのか。だから外に出たがないんだな

このままでは、いつまで待っても花見に行けないとアメリカは思った。

しかし、アメリカは花見に行きたい。一人でも行けるが、日本なら花見するのにいい場所を知っていそうなので、どうしても日本を連れていきたいのだ。

「そんなことより、今すぐ見に行こうよ！」

「すみません。私は体調が優れないので、また次の機会に誘って下さい」

やはり日本は行きたがらない。丁寧な断っている。

そこで、アメリカは日本を担いだ。日本は状況が理解できないらしく、なんだかほつけた顔をする。

「OK」

アメリカは日本を担いだまま歩きだした。だんだん玄関へと近付いていく。

「え？ あの……」

「花見に行こう！」

「離して下さい！ そしたら善処しますからっ」

世界は花見を中心に回るんだぞ 2 / 4 (後書き)

H a y f e v e r

↓ 枯草熱、花粉症のことです。

世界は花見を中心に回るんだぞ 3 / 4

ゆるやかな南風が頬を撫でる。風に混じって散りゆく花弁が、暖かな季節を思わせる。今はそんな季節の正午過ぎである。

「アメリカさ——ヘクシュンツ」

どうやらこの美しい風には花粉も混じっていたらしい。枯草熱（花粉症）を患う人には辛い季節となっているようだ。

「なんだい？」

アメリカは日本に聞き返す。日本は口元を押さえてもう一度くしやみをし、その後にアメリカに再び話し掛けた。というよりは、自分の意見を主張したと言ったほうが、いいかもしれない。

「降ろして下さい。大衆の面前でこんな恥ずかしい……ああ、皆さんの視線が痛いです……」

日本は未だにアメリカに担がれていたのだ。それは回収したイタリアを担ぎ運ぶ、ドイツのそれによく似ていた。

「日本が出て来ないんだから、しかたないじゃないか」

「……分かりました。だからもう降ろして下さい。いい場所に案内しますから」

日本は嫌々ながらも、花見をすることを承諾した。しかし季節の移り変わりをこよなく愛する日本が花見を嫌がるようになるとは、枯草熱の恐ろしさと辛さは相当なものなのだろう。

「やっぱり日本は優しいな」

言いながらアメリカは日本を地面に降ろした。だが日本はそれはそれで困る。靴を履いていなかったのだ。

その時日本は思いついた。これを理由に帰宅しよう、と。

「…困りましたね。誰かさんのせいで素足のまま外出してしまいました」

日本はちらつとアメリカを見る。

「じゃあ、また担い——」

「結構です」

日本の思惑は失敗に終わった。

「はあ……しかたありませんね。このまま行きましょう。この道は綺麗なまらに均してありますし」

と、いうことで日本とアメリカは歩き始める。コンクリートを使用していない土でできた道は、足の裏をひんやりと冷やし、それはそれで気持ち良かった。

歩きだしてしばらくした頃、アメリカが日本に尋ねた。

「日本、まだ着かないのかい？」

「まだですよ」

アメリカはなかなか桜を見れず、つまらなさそうに歩いている。

「まだかい？」

「まだですよ。ヘクシュツ。さっきそう言ったばかりじゃありませんか」

二人は歩いた。

アメリカは桜が見れず、もどかしそうに。日本は枯草熱に困りながら。土でできた道を歩いていた。

「日本、やっぱりこの辺にある桜でいいよ」

アメリカは立ち止まりそう言った。そばには小さい桜の木が生えている。

それを見た日本はふっと笑い、目の前の小さな丘を指差した。

「そんなこと言わないで下さい。この上が“いい場所”です。とても綺麗なんですよ」

日本が言い終わらないうちに、アメリカは丘を駆け上がっていった。

「……うわぁ……」

アメリカが丘で見たものは——当然桜だった。世〇樹みたいに大きな桜が、そこに生えていた。さらにその回りには、普通サイズの桜が沢山生えている。

「ハッハアハア——ア、アメリカさん、そんな、ゴホツ、走らなくても……」

アメリカが桜に見入っていると、後ろから息も絶え絶えの日本が

やってきた。呼ばれたアメリカはゆつくりと振り向き、日本を見る。

「す、すごい……すごいよ日本！ Beautifulだよ！ Greatだよ！」

「うわっ！？ ちょ、やめ……」

そして日本をガクガクと揺らす。揺らされた日本は驚いて声をだした。だが、そんなに嫌な気持ちはしなかった。アメリカはひとしきり英語を話すと、日本から手を離れた。

「ヘクシユンツ——そうですね。桜は菊とならび日本の国花でもあります。多くの人が、この花と木を愛しているんですよ」

日本はアメリカが桜を美しいと言ってくれたことが嬉しかった。自分の家の代表的な樹木を、褒められたことが嬉しかったのだ。

「さあ、もっと近くであの花を見ましょう」

「そうだな！」

日本とアメリカは桜の木の下に行き、そこに座った。花びらが落ちてくるたびに、アメリカは嬉しそうに花びらを見る。

そんなアメリカを見た日本は、ゆつくりと桜について話し始めた。

「ここは桜ヶ丘といいます。名前の通り、桜の丘です。今日は空いています。いつもは花見をしにきた人で混んでいるんですよ」

アメリカは興味津々に、日本の話を聞いている。

「桜の花言葉は、心の美しさ・精神の美・優美な女性、です。素敵ですよ」

日本は微笑んだ。

「全部君にピッタリだな」

「私は男ですよ」

日本は微笑みながらそう言った。

二人は花見を十二分に楽しみ、その後帰宅した。

世界は花見を中心に回るんだぞ 3 / 4 (後書き)

桜ヶ丘

↓ 実際にある地名とは関係ありません。つまり聖〇桜ヶ丘とは関係ないのです。

く次の日く

「日本！ またあの桜を見に行こう！」

「いいですよ。では外出の用意をしますので、少々お待ち下さい」

日本は枯草熱対策に自前のマスクをつけて、アメリカと花見に行った。昨日の花見が意外にも楽しかったので、結構乗り気だった。

くまた次の日く

「日本！ 花見に行こう！」

「またですか？ …いいですよ。少々お待ち下さい」

少し面倒だったが、アメリカがあまりにも桜を気に入っているの
で、日本はまた花見に行った。

くまたまた次の日く

「日本、花見に行こう！ 今日はお菓子も持ってきたんだぞ！」

「アメリカさんは桜が好きですね。だったら私も、お茶とお菓子を持
って行きましょう」

さすがに、お菓子まで用意してきたアメリカの誘いを断れず、日
本はまた花見に行くことにした。

「幾日か経ったある日」

「日本！ 花見に——」
「嫌です」

日本は断った。だがアメリカは驚くこともなく、また日本を担いで花見に行こうとする。だが今回の日本は強敵だった。くるまった布団から足すら出さないのだ。

「もうここら一帯の桜の花は散りました。ヘクシュツ——“花見”はできません。また来年行きましょう。あと花粉掃って下さい」

アメリカは花が散るまで毎日日本を誘い、花が散ってもまだなお誘っていたのだ。

「だけど君ん家は縦長だから、まだ咲いてる所とか、これから咲く所もあるだろう？」

「桜前線を追い掛ける気ですか！？ すみません、私の老体でそれは無理です」

日本はシュパツと布団をまた深く被る。そしてピクリとも動かない。

「えー、に〜ほ〜ん〜！」

アメリカは日本を揺さぶる。揺さぶって揺さぶって揺さぶって揺さぶって揺さぶって揺さぶって揺さぶって揺さぶって——

「そんなに好きなら桜をあげますよ！」

この一言で、アメリカの揺さぶりが止まった。

「ほ、本当かい!？」

「ええ。そしたらアメリカさんも、自分の家でお花見ができるでしょう」

「ありがとう日本。日本最高だよ！」

アメリカは満面の笑みで、日本が纏っている布団を引つpegす。そしてぎゅうううと日本にハグをする。

——欧米式挨拶は恥ずかしくて苦しいです…

日本は苦笑したままハグされていた。

~~~~~  
~~~~~

段々暑くなってきた、日本の枯草熱も治まってきた頃。

「うわああああ！ にほんー！」

「ア、アメリカさん!？」

道を歩いていた日本に、猛スピードで走ってくるアメリカが見えた。アメリカは日本の前まで来ると止まった。

「どうかしたんですか？」

「日本が贈ってくれた桜、病虫害がいるからって全部上司に焼却処分されたんだよ」

「…たしか2000本程ありましたよね？」

これは日本もショックだったようだ。スッと顔が青くなる。アメリカはそれを見て、申し訳ない気持ちになった。

「日本ごめん…俺——」

「でも病虫害が見つかってよかったですね。病気が広がるのを未然に防げたのは、なにより幸いです。桜は…しかたないですね。また若木が集まったらあなたに贈ります。それまで暫く待って下さい」

日本はふう、と息をつきそう言った。アメリカは予想外の日本の反応に、ポカンとする。

「2年くらいかかるかもしれませんが……それまで待てますか？」

日本は念をおすようにアメリカに聞いた。その顔は優しく笑っている。

「もちろん待てるぞ！　ありがとう、日本」

「どういたしまして」

その後贈られた桜は、毎年三月～四月にアメリカの首都ワシントンのポトマック河畔に咲き、今でもアメリカ市民を楽しませている。

世界は花見を中心に回るんだぞ 4 / 4 (後書き)

桜

↓この話は史実に基づいて創ったのですが、2回も桜あげるなんて、結構日本(東京)も優しいですね。

小ネタ⁺日本とカメラ（前書き）

小ネタは会話文と天の声（？）のみになっています。

小ネタ＋日本とカメラ

《Q・電球を取り替えるには何人の日本人が必要？》

「そんなの一人に決まっているじゃないですか」

《A・十人》

「え、ちょ……九人は何をしているんですかつ！？」

《理由・一人が電球を取り付け、九人がそれを撮影する》

「そんなもの撮影しませんよ。というか九人も撮影するんですか……」

「H A H A H A！ でも日本は写真好きだよな」

「アメリカさん……ですが被写体は選びます。美しいもの、感動的なもの、レイヤーなどがいいです」

「レイヤー……？ まあ、あまり怒らないでくれよ。これはよく言われるアメリカンジョークなんだ。ブラックジョークに近いけどな」

「ジョーク、ですか。ですが、私だってそんなにいつもカメラを持

ち歩いているわけではありません」

「じゃあその——今首にかけてるものはなんだい？」

「これは……だから……ストロボですよ」

「それも写真撮影に使うものじゃ……」

「あ、いえ、実はコレ、デジカメです。新製品なんですよ」

「カメラじゃないか……」

「あっ……」

小ネタ[†]日本とカメラ（後書き）

ネタはブラックジョークのサイトで見たものです。
とくにオチはありませんが、日本可愛いなー…と思ひまして。

世界は台風を中心に回るのよ[♪] 1 / 4 (前書き)

時代：現代^{たぶん}

場所：アメリカ

登場人物：アメリカ、イギリス、日本、カトリーナ

オリキャラが登場します

世界は台風を中心に回るのよ ♪ 1 / 4

世界は台風を中心に回るのよ ♪

「アメリカさあああん！ 愛してるわー！」
「君は誰だい！？」

ハンバーガーを食べていたアメリカに向かって、木々や建築物を破壊しながら一人の女性が走ってきた。

その女性は全身で“アメリカ愛”を表しているようだ。勿論服には『IはあとNY』の文字がある。だがアメリカはドン引きしていた。

「なあに寝ぼけたコト言ってるんですか。私は貴方のGirlfriend、カトリーナですよ。カ・ト・リ・イ・ナ♪」
「君とは、はじめましてなんだぞ！？」

アメリカは冷や汗を滝のように流す。そしてハンバーガー（2つ目）をもしかもしか食べる。

「どうやら女性——もといカトリーナはアメリカを知っているようだが、アメリカはカトリーナを知らないらしい。つまりアメリカは知らない人から彼女宣言をされてしまったのだ。」

知らないと言われたカトリーナは、ガーンと効果音を響かせて止まった。

「ひ、ひどいわアメリカさん！ 私とした×××や○○○○は忘れただっていうんですか？」

「君とそんなことした覚えはないよっ」

ピーやズキューン　な発言を連発し、泣き崩れるポーズをするカトリーナ。状況を把握できていないアメリカは困惑しているようだ。とりあえず食べかけのハンバーガーを完食したのか、手にある包み紙を丸める。

すると、カトリーナが勢いよく顔を上げた。そして一人で語り出す。

「まあ、私は影ながらアメリカさんを見守ってきた身……認知されないのも、しかたないことです。私の苦勞悲話、聞きたいですか？」

「俺は全く興味がない——」

「私がアメリカさんと出会ったのは、数日前でした。その時私は貴方に一目惚れしたのです」

アメリカに問い掛けたくせに、返答を待たずにカトリーナは喋る。その話術は、他人に返答する間を与えない。

「だから俺は聞き——」

「それからいつも貴方の傍にいました。細かく言つと常時半径5m以内にいました。貴方が寝ている時は優しく添い寝していました」

「嘘だっ！」

「証拠に貴方の下着を持っています」

「うわあああ！！？」

アメリカはカトリーナがピラツと見せた下着を引たくる。カトリーナは、「照れ屋さんなんだから」みたいな感じでキャーキャー言いながら笑っていた。

だがアメリカはそんなカトリーナとは全く違う心情だった。アメリカは遂に気がついたのだ。

—— ストーカーだ！

アメリカは呆然とした。日本のテレビドラマでストーカーの物語は何回か見ていたが、本物はそれよりも100倍恐ろしい。まさに愛が重い。ヘビー級の想いだ。

—— た、確かに俺は全米の女性を虜にできる程カッコイイヒーローだけど……

アメリカは自惚れつつも焦る。その元凶であるカトリナは、まだニコニコと笑っている。

しばらくして解決策を思いついたアメリカは、勇気をもってカトリナに言った。

「Sorry・俺はみんなのヒーローだから、君と付き合うことはできないよ」

アメリカはなるべくカッコよく、さらりと言うように心掛けた。そしてこの作戦は成功したと、勝手に思い込んで安心した。

だが、そんなわけなかった。

とてつもなく重い“想い”の危なさを、彼は知らなかった。

『愛は憎のはじまり』と云うように、彼女の愛は、同時に生まれていた憎しみに変わることになるのだ。

「え、ちょ、ちょっと待って！！こんなに……こんなにあなたを愛しているのに!？」

「俺はみんなのヒーローだからな！ Bye-bye」

アメリカは“みんなのヒーロー”という部分を再び強調してそう

言った。そして安心しきったのか、くるつと方向転換してその場から立ち去ろうとした。ハンバーガーの包み紙を、傍にあるゴミ箱にポイツと捨てる。

「……？」

しかし万力のような握力で、突然肩を掴まれた。食い込む爪は痛いし、骨がギシギシいつている。

アメリカ力が振り返って文句を言おうとすると、

「あなたなんか…あ、あんた……なんて……」

そこには鬼のような顔をしたカトリーナがいた。

さらに、周りに風が吹き荒れ、その風の勢いと規模はどんどん増していく。その風の中は、言うまでもなくカトリーナだ。

「あんたなんて死ねばいいのよ！ 私の愛を踏みにじって！ 私はあんなに尽くしたのに！」

「俺は君に尽くされた覚えはないよ？！」

「うるさいうるさいうるさーい！ あんたを殺して私も死んでやる！！」

風は一気に膨らみ、爆発した。

いや、もうすでに“風”といえるレベルではない。そんな優しいものではないのだ。

看板を飛ばし、道路をえぐり、電柱を折る——“大型の台風”が、現れた。

「あだっ！」

アメリカの頭に飛んできたゴミ箱がぶつかる。その拍子に眼鏡も飛んでいった。そのせいか、吹きすさぶ台風のせいか、前がよく見えなくなる。

「ええそうよ。私は台風よ。でも国のあんたとなら恋人になれるかもって思ってた！……でも、違ったのね。やっぱり私は台風ではない。力を出し切ったら消えてなくなっちゃう、馬鹿みたいな自然現象だったのよ！」

カトリーナは泣いていた。大粒の涙をボロボロと零し、血が出そうな程強く拳を握り、大声で叫んでいた。

しかし、アメリカにそれが伝わることはない。

「ホントに君、やめ——ぼがつ！？？」

何か言おうとしたアメリカに、飛んできた看板がぶつかった。

後頭部にクリーンヒットした看板の角は、彼を意識不明の重体におとしめる。

「「「あなたのこと、大好きだったのに……大大大好きだったのに
いいいい！！！！！！」」」

その横で、カトリーナは暴れ続けた。

アメ さん

―― あめさん？

アメリカ ん

―― 俺を呼んでるのか？

あんた、なんか 殺してやるッッ！！！！

「う、うああああ！」

「アメリカさん！？」

アメリカは跳ね起きた。グッピヨリとした嫌な汗をたくさん流している。

そんなアメリカの横には、日本がいる。なぜか割烹着姿だ。日本は跳ね起きたアメリカを心配そうに見つめ、大丈夫ですか、何かありましたか、と執拗に尋ねてきた。

「大丈夫 なんだぞ」

アメリカは力無く微笑む。それは何かに疲れたような、諦めたような笑いだった。

大丈夫だと言われ日本がほっと胸を撫で下ろすと、アメリカは気が付いたように辺りを見回し始めた。

「 そういえば、ここはどこなんだい？ カトリーナは？」

「ここは病院です。今ここに居るのは私とアメリカさんだけなので、カトリーナ…さん？ その方はいませんよ」

日本は丁寧に説明した。

「病院？　なんで病院なんかにいるんだ？」

「覚えてないんですか？　アメリカさんは超大型の台風による被害で倒れていたんです」

「台風……」

「ええ。台風はもう去りましたが、その被害は深刻……なのでしばらくは安静にして下さい」

日本はニツコリと笑う。見るものを安心させる、優しい笑みだ。

アメリカはまだ状況を把握できてなかったが、これからどうになるだろうと思った。もしどうにもならなくても、どうにかしてみせよう。

アメリカが静かに決意する一方、日本はそわそわしていた。

「あの……アメリカさん、目覚めたばかりのところ悪いのですが、アメリカさんに届いているお見舞いの品を紹介してもいいですか？」

「ん？　あ、ああ。いいんだぞ」

「では——」

日本は割烹着から、鮮やかな緑色の巻物を取り出した。《見舞品一覧》と書いてある紙が、表紙のように貼ってある。

——ニンジャ？　ドラえもん？

日本は馴れた手つきで巻物の紐を解く。広げたそれを丁寧に両手で持ち、読み上げ始めた。

「まず私、日本からは、米国赤十字社に二十万\$の資金供与と、テント・毛布・発電機・簡易水槽等を八十万\$分です。米国の皆さんに不憫な思いはさせたくありませんからね」

「アイスはないのかい？」

「すみません、私からの見舞品アイスはありません」

アメリカはアイスがないと知ると、チエーと口を尖らせた。

日本はこんな時にでもアイスを欲しがるアメリカに苦笑しつつ、続きを読む。

「あとは中国さんからの510万\$。韓国さんからの3000万\$です」

げんなり。

それを聞いた途端、アメリカの表情は露骨に変わった。口は歪み、眉は情けないハの字になる。

一言で言い表すなら、げんなりした。

「どうかしましたか？」

「韓国からののは、断ってほしい　ぞ」

「何故です？」

「後々、恩に着せられたくないからな」

「ああ、なるほど」

日本はどこから取り出した筆ペンで、韓国の部分を消すように線を引いた。

韓国的には悲しいことに、アメリカと日本には恩着せがましい韓国が簡単に想像できたのだ。

『あの時助けてやったのは俺なんだぜ。だから今俺を助けてほしいんだぜ！』

『俺は知ってるんだぜ。お前は恩を仇でかえすような奴じゃないんだぜ』

腕を組み、うんうんと頷く二人。

「そういえば、イギリスとかEUの皆からは何かきているのかい？」

アメリカは平静を装ったような、特別期待していないようなそぶりで日本に聞いた。

だが内心では期待しまくりだった。むしろ、きていると分かっているって聞いた感じだ。変な確信というか、自分の人望にたいして自信をもっていた。

「——俺の為じゃない」とか言いながらアイスくれるんだろうな、イギリス

目をつむり、頬を染めてそう言うイギリスを想像したアメリカは、ぷぷつと笑った。

「ええと——きていませんね」

ぷぷ、と笑っていたアメリカの顔は、そのまま凍りついた。

「……アメリカさん？」

ピタッと止まったまま動かないアメリカの顔を、のぞきこむようにして日本は聞いた。

だが、反応がない。まばたきすらしない。とことん静止している。

「あのー、もしもーし？」

「……日本」

「あ、はい！ なんですか？」

「イギリスに手紙を出すから、紙とペンを貸してほしいんだ」
「いいですよ。私のでよければ、お使い下さい」

——変な夢見たのも、嫌な汗かいたのも、みんなイギリスのせいだ！ あんな下手物作るくせに！

アメリカはとりあえず、よくわからない嫌な感情は見舞品をくれなかったイギリスのせいにして、手紙を書き始めた。

世界は台風を中心に回るのよ 2 / 4 (後書き)

韓国からの「このことで韓国が政治的に」とかいう文章まで作って、アメリカは援助を断ったそうですWW

アメリカは窓の外を見ていた。ただ、ぼーっと見ていた。しかし今は眼鏡をかけていないので、それほどよく見えていないかもしれない。

アメリカは外に出たかったのだ。出たいこととか、そういうものは無いのだが、なんとなく外に出たかった。

だが、安静にしていると云われたので、未だ出られずにいる。

「……俺は安全に、静かに、少し散歩するだけ、なんだぞ」

違った意味で無理矢理安静を定義する。そして部屋にある唯一の小さな窓を外し、窓枠に手をかけた。

アメリカは見つからないように、窓から飛び降りた。

全く下を見ずに飛び降りたアメリカだったが、部屋が2階だった為怪我はしなかった。

「うわぁ……」

しかし服に泥や土がついた。

病人用の白い服には、その汚れが異様に目立つ。後でどう言い訳しようか、そんなことを考えながらアメリカはのろりと歩いた。

下を向いて歩いていると、ある場所から土の地面ではなく、芝の地面になっていることに気付いた。

そこは、病院の小さな広場だった。

なんとなく芝生の上に立ったアメリカは、ぬるい風が吹いてくる空を見上げる。

そこには大きな雲が流れていた。思わず、微笑みが漏れる。

「俺はヒーローだから、一人の人に尽くせないんだ」

アメリカは空を見上げたまま、誰に言うでもなくそう言った。辺りに人の気配はしない。風で芝生がかすかに揺れているだけだった。

「でも君のこと、好きだったんだぞ」

しかし人がいないからこそ、言えたのかもしれない。

「もつと違う出会い方をしたら、いい友達になれた気がするよ」

心からの言葉でできたその独白を聞いていたのは、青い空と雲だけだ。

アメリカはなんだか急に馬鹿らしくなって、少し笑った。
と、その時。

少し強い風が、アメリカの背中を優しく押した。

「…そう。それは嬉しいわ。私はアメリカさんが、大好きなんですもの」

「っ！ 君——！！」

声が後ろから聞こえた。それと同時に、両肩に手を置かれたような感覚がした。

驚いたアメリカはすぐに振り向く。そこに《彼女》がいるんじゃないかという、小さな期待を抱いて。

「今も昔もこれからも。ずっとあなたを——愛しています」

だがそこに人などいるはずもなく、ただ風が吹いて顔にあたっ

ただけだった。

ただ彼女の声が響いた、それだけだった。それは告白の返事ができなかった後悔から、アメリカがつくりだした幻聴だったのかもしれない。

あるいはまだ、怪我のせいで頭が朦朧としていたのかもしれない。

「……………」

しかし、そんなことはどうでもよかった。
聞こえたのだから。

その声を今この状況で信じない程、アメリカは馬鹿じゃなかったのだ。

「……………」ありがとう

いつの間にか、そんな言葉が口から出ていた。

アメリカはもう、彼女のことと悩むのを止めた。しかしいつまでもあの自己中台風を覚えていようと、そう心に決めた。

「「お、ちょ、日本！ あいつなんで外にいんだよ？」」

「「アメリカさん？ 変ですね。安静にするよう言ったのですが…」」

なにやら話し声が聞こえるのでアメリカが目細めて見ると、並んで歩いてくるイギリスと日本がいた。

「「なんかあいつ……汚くないか？」」

「「たしかに泥が白い服について……どうしたんでしょうか？」」

「「あ、まさか、病院から逃げ出てきたんじゃない——」」

「「イギリスさん、待って下さ——」」

今度はイギリスが、心配したように走り寄ってくる。

アメリカはなんとなく、逃げようと思った。理由は特にないが、強いていうならそのほうが面白そうだったからだ。ということで、走った。

「に、逃げんな！　せっかくいろいろ手配してやったのに！　待ちやがれこのハンバーガー！！！」

「H A H A H A ！　いやだね！　くたばれイギリス！！！」
「二人とも、待って下さいっ」

アメリカは笑いながら走った。

イギリスは怒りながら追い掛けた。

日本は困惑したように見ていた。

アメリカは、幸せだった。

世界は台風を中心に回るのよ ♪ 4 / 4 (後書き)

ハリケーン・カトリナが、アメリカLOVEなヤンデレ気味暴走女だったら面白いだろーなー、と思って突発的に書いた話でした。お見舞いの件とかは調べるうちに出てきたもので、各国の反応が面白かったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6803j/>

The world revolves around × × × .

2010年10月12日20時04分発行